

# 茨城大学学報

第283号

平成21年2月～平成21年3月



阿見キャンパスの桜

## INDEX

- ◆公開シンポジウムを開催
- ◆三大学交流セミナー「地域と大学」を開催
- ◆「常陸大宮アクションミーティング2009」を開催
- ◆東海村と歴史研究で「地域連携シンポジウム」を開催
- ◆日本語研修コース公開発表会
- ◆「留学生30万人時代の大学の課題」講演会
- ◆図書館でタウンウォッチングを開催
- ◆韓国のCatholic上智大学が大学教育センターを訪問
- ◆農学部—東京医大霞ヶ浦病院「第2回交流セミナー」開催
- ◆平成20年度茨城大学卒業式
- ◆永年勤続表彰

茨城大学総務部総務課広報係

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

## ◆ 公開シンポジウムを開催

### 「茨城県北地域振興の新たな可能性をさぐる－茨城県北ジオパークをめざして－」

平成21年2月1日（日）に茨城県立歴史館・講堂において、茨城大学地域連携推進本部主催による公開シンポジウム「茨城県北地域振興の新たな可能性をさぐる－茨城県北ジオパークをめざして－」が開催されました。

平成16年の法人化以降、「地域貢献」を大学が進むべき重要事項の1つとして位置づけ積極的に推進してきました。本シンポジウムは、産・学・官・民の連携による茨城県北地域活性化のための地域振興策の一つとして、県北地域の地質資産を保全しながら観光資源として活用するジオパーク（※注）立ち上げに向けたキックオフシンポジウムとして開催されました。

当日は、一般市民や県北地域の関係市町村関係者を含め予想を上回る150名の入場者があり、池田幸雄茨城大学長の開会挨拶、天野一男地域連携推進本部長の開催趣旨説明によりシンポジウムがスタートし、特別講演者のC.W.ニコル氏から「森から未来をみる」の演題で、ジョークを交えながらも環境保全に関する貴重な話がありました。



C.W.ニコル氏の講演

引き続き、世界ジオパークネットワークの候補地に挙げられるなど、日本でのジオパーク運動において先進的な活動を行っている新潟県糸魚川市から、米田徹糸魚川市長を含めジオパーク活動に携っている4名の講師による講演があり、ジオパークを推進するに至った経緯や、実際の活動等についての実践報告がされました。

茨城大学からは、(社)全国地質調査業協会連合会から表彰を受けるなど実績のある「茨城大学学生地域参画プロジェクト」(茨城大学社会連携事業会支援)の平成19、20年度の優秀プロジェクトである「地質情報活用プロジェクト」チームの学生らによるジオパーク活動の実践例の紹介がありました。

最後に、本シンポジウムを企画した天野一男地域連携推進本部長から、「茨城県北・福島県南ジオパークの提案」と題して、茨城県におけるジオパーク設立の有効性、可能性について講話がありました。

講演終了後の質疑応答では、ジオパークに関する質問や激励、本シンポジウムに関する感想など多くの意見があり、地域再興への明るい展望を垣間見せ終了いたしました。

(※注：ジオパークとは、地域の美しい地質や地形などの自然遺産をもち、考古学的・生態学的・文化的な価値のある地域を自然の中の公園として国際的に認定し、それらの遺産を保全すると同時に観光資源として活用して地域振興をめざす。)



学生によるプロジェクト報告



質問に回答する各講師

◆ 第3回 茨城県立医療大学・東京医科大学霞ヶ浦病院・茨城大学農学部  
三大学交流事業「三大学交流セミナー」



2009年2月2日（月）の15:30～18:30にかけて、茨城大学農学部こぶし会館において標記の交流セミナーが開催されました。本事業は阿見町という同一地域に近接する大学間の交流活動として3年前より定期的に開催されており、3回目の今回はより実質的な相互理解を深めるべく、茨城大学が当番校として「三大学交流セミナー」という形式で開催されました。特に今回は「地域と大学」というテーマで、主に阿見町との連携活動の取り組みに焦点を当てた情報交換を目的とし、各大学および地元の阿見町から計73名の参加者を得て開催されました。各大学からは①阿見町における地産地消と学校給食に関する取り組み（茨城大学農学部）、②「あみ健康づくりプラン21」の中間評価における支援（茨城県立医療大学）、③阿見町における地域医療の現状と将来—大学付属病院としての役割—（東京医科大学霞ヶ浦病院）といった各大学の専門性を活かした町との連携活動が報告され、続く総合討論では出席いただいた阿見町の大崎副町長をはじめとする役場関係者から更なる協力への期待が表明されるとともに、三大学間の更なる連携方策についていくつかの提案がなされました。具体的には、三大学連携での公開講座の開催や、茨城大学農学部と東京医科大学霞ヶ浦病院との間で今年度より実施され始めた「研究交流セミナー」を三大学間に拡大する方向性などが話し合われました。また第2部の懇親会でも、地元阿見産の農家料理を囲んで今後の連携活動についての情報交換に花が咲く大変有意義な交流セミナーとなりました。最後に、次年度は東京医科大学霞ヶ浦病院が当番校となって本事業を継続することを確認して閉会となりました。

## ◆ 「常陸大宮アクションミーティング2009」を開催

平成21年2月8日、茨城大学と常陸大宮市とによる「常陸大宮アクションミーティング2009」を開催した。これまでも茨城大学と常陸大宮市は、地域連携協定にもとづき、さまざまな「まちづくり」の活動に共同で取り組んでいるが、2008年度に常陸大宮市で学生が参加して行われた活動・研究の報告と、学生による「商店街活性化プラン」発表会として開催したもの。

第一部では、「西塩子回り舞台組み立て・公演ボランティア」など2008年度の活動報告や、卒業研究「都市農村交流の有効性と団塊世代の可能性」、「ふれあいの森のスズメバチ」など常陸大宮市をフィールドに行われた研究成果が発表された。第二部では、「常陸大宮活性化への提案とそのプロセス」や「先進事例から考えるこれからの常陸大宮商店街」、「歩こう、わくわく発見の道」「5！5！（GO!GO!）常陸大宮」のタイトルで常陸大宮中心商店街を活性化するためのプランを学生らが提案、発表した。

当日は、多くの市民の参加があり、関係教員、学生らは「来年度に向けて、常陸大宮の元気なアクションにつなげられれば」と語っていた。



学生による報告の様子

## ◆ 東海村と歴史研究で地域連携シンポジウムを開催

平成21年2月14日、「『石神組（いしがみぐみ）御用留』 発刊記念シンポジウム」を開催しました。「石神組御用留」は同大学図書館所蔵の水戸藩石神郡奉行所の日誌で、東海村とその周辺の江戸時代の暮らしを伝える資料であることから、同大学と東海村が、この資料を解読し、全二冊（756頁）で刊行しました。（解読・脚注・索引は大学関係者と村民でつくる石神組御用留研究会が担当。発行は東海村教育委員会）シンポジウムの会場テクノ交流館リコッティ（東海村）には、村上達也東海村長・村民など約220人が参加しました。

磯田道史准教授が「寛政文化期の水戸藩」をテーマに講演、解読に携わった関係者の報告の後、パネルディスカッションでの意見交換で締めくくりました。

本学図書館でも、2月12日から23日まで「石神組御用留」の世界展を開催し、「石神組御用留」原本、村絵図や拓本のパネル展示を行い、一般公開しました。

関係者らは「郡奉行の日誌が現存するのは珍しい。広く活用されるのを期待している」とし、研究報告集も発行しました。



講演する磯田道史茨城大准教授



講演者と報告者によるパネルディスカッション

### ◆ 日本語研修コース公開発表会

留学生センターは、2月15日、水戸市国際交流センターにおいて「茨城大学日本語研修コース公開発表会」を開催しました。今回で4回目となるこの公開発表会は、日本語研修コースの授業の一環として行う留学生による自分の国や文化の紹介を広く地域の方々に公開し、地域の国際理解・交流を深めることを目的としています。

発表会では4カ国（バングラデシュ、中国、韓国、ベトナム）計8名の留学生がパワーポイントを用いて、「韓国の酒文化」、「内モンゴル相撲の服装」など、各自が選んだテーマについて日本語で発表を行いました。会場にはホームステイ家族、茨城大学の学生、一般の方々など約70名の参加者があり、発表の後は活発な質疑応答が行われました。

参加者からは「テレビ等で見聞きする他国の内容より、より身近に感じられた」「様々な国の方に触れることができた」などの感想がありました。また、留学生にとっても学内外の多くの方々と接することのできる貴重な異文化交流の機会となりました。



内モンゴル相撲の服装を紹介する留学生

## ◆ 「留学生30万人時代の大学の課題」講演会

近年留学生が減少傾向にあり、いかに増やしていくかが本学でも大きな課題となっており、「留学生30万人計画」と「9月入学」についてのワーキングチームを新たに設置して検討を進めているところです。その取り組みの一つとして、平成22年2月20日(金)にVCSを活用した三キャンパスを結ぶ「講演会」がこのほど開催されました。

この講演会には、留学生交流の戦略を専門的に行っている明治大学国際日本学部教授横田雅弘氏を講師として招きました。横田教授は世界の主要国での留学生政策についての事例や、日本国における留学生受入の10万人計画から30万人計画に至った流れなどを紹介し、日本の大学において留学生受入の増加のための戦略方法や大学での受け入れ態勢についても外国の大学を参考に述べました。

その中で、「今後は大学本体が変わる必要があり、これまでの留学生だけに対応する『出島方式』ではなく、大学全体を世界標準にしていくことが大事である。移民・永住も含め、卒業後も日本で働く可能性も視野に入れ、社会的インフラを整備していくことが重要」と述べました。さらに本学WEBページによる広報が、どの順位にあるか世界ランクで示した具体的な資料も提示されました。

講演会には3キャンパスから80名余りの教職員が参加し、講演終了後には積極的な質疑が行われ有意義なものとなりました。



(写真右：講演する横田雅弘明治大学教授 左：VCSを活用し三キャンパスで同時に開催した)

### ◆ 図書館でタウンウォッチングを開催

図書館では、平成21年2月20日と21日にわたり、市内の歴史遺産を巡るタウンウォッチングを開催しました。

学内の教員地域連携プロジェクトで採択された「歩いてみる『江戸時代の水戸』－教育と観光の活性化プロジェクト－」の一環として、水戸商工会議所と共催で実施したもので、同館の小野寺淳副館長がガイドをつとめました。

当プロジェクトは、同館と共同研究契約を締結した財団法人水府明德会（徳川斉正会長）より提供された城下絵図のデータを基本として進められているものです。

20日（金）の水戸城郭コースと21日（土）の城下町コースに参加したのべ27名の市民らは、現在と江戸時代の水戸を重ねた「古地図と歩こう！水戸の城下町マップ（試作版）」を広げたり、メモを取ったりしながら、一般の観光情報からは得られない貴重な話に耳を傾けていました。

ツアー後のアンケートで「小学校の総合学習で使えるように、カラフルで字を大きく」、「駅や観光客へ配布してほしい」などの意見をいただきました。

当プロジェクトでは、アンケートを踏まえて、年度内にマップを完成させる予定です。



ツアー参加者に説明する小野寺図書館副館長（写真中央）

## ◆ カトリック 韓国のCatholic上智大学が大学教育センターを訪問

大学教育センターは、平成 21 年 2 月 24 日、韓国にある Catholic 上智大学からの訪問を受けました。同大学は韓国安東市にある学生総数約 2500 名の中規模大学で、教育力の向上を目指して教育改革を進めています。趙昌来学長を含む 16 名の訪日調査団は、当センターが推進している理系基礎教育プログラム（平成 19 年度「特色ある大学教育支援プログラム」採択）に注目し、本学にも立ち寄られました。池田学長と白石教育担当副学長が歓迎の挨拶を行ったほか、大学教育センター長を含む関係教員および職員が対応にあたりました。

当センターでは、理系基礎教育プログラムにおける習熟度別のクラス編成や授業形態、教材開発、e-ラーニング導入の実際について、同プログラム責任者が紹介したほか、数年前から取り組んでいる英語教育プログラムである「総合英語」についても、習熟度別授業の実例やICTの利用法などについて、関係教員による紹介を行いました。これに対する訪問団の関心は高く、質疑応答は個々の事項の詳細に留まらず、これらの科目を含めた初年次教育の在り方からキャリア教育の実情にまで及び、有意義な意見交換をすることができました。今回の訪問をとおして、韓国においても我国同様、少子化にともなって大学入学志願者の数と質の確保が困難な状況にあることが伺えました。



積極的に意見交換する訪問団と茨城大関係者

## ◆ 農学部－東京医大霞ヶ浦病院「第2回研究交流セミナー」開催

農学部は3月16日、東京医科大学霞ヶ浦病院との連携協力協定に基づき、第2回研究交流セミナーを東京医科大学霞ヶ浦病院・医療福祉研究センターで開催しました。本会には、茨城県立医療大学からの参加もあり、約45名の大学関係者が参加しました。

初めに松岡健東京医大霞ヶ浦病院長及び中島紀一茨大農学部長の挨拶があり、隣同士の連携強化、さらに阿見町に立地する三大学間の交流と連携を推進していくことへの抱負が述べられました。

セミナーでは、茨大農学部の豊田淳講師から「脳機能と栄養－動物モデルを用いた新しい展開－」、東京医大霞ヶ浦病院の藤森実教授から「組換えビフィズス菌製剤による固形癌の嫌気的環境を標的とした新規 Drug Delivery System の研究開発」についての研究紹介があり、大変活発な意見交換がなされました。

続いて、本多彰東京医大霞ヶ浦病院共同研究センター長の案内により研修医室、研究棟、外来棟施設の見学が行われ、セミナー後には、両大学間の親睦会・研究者懇談会が医療・福祉センターで開催され、そこに於いても活発な研究情報交換が行われました。

最後に、高原英成茨城大学農学部研究推進委員長から、この研究交流セミナーの輪に茨城県立医療大学にも参入して頂くよう働きかけることや、次回は茨城大学農学部が当番校となり開催する旨の案内がありました。



研究交流セミナーの様子

## ◆ 平成 20 年度茨城大学卒業式告辞

茨城大学長 池田幸雄

すっかり春めいて参りました。桜の花がほころび初めている今日この頃で御座います。本日、茨城大学を卒業される 2137 名の皆さん、ご卒業本当におめでとう御座います。茨城大学を代表してお祝いを申し上げます。また、ご列席のご家族の皆様にも、心からお祝いを申し上げます。



現在の世界は、100 年に一度と云われる「世界同時不況」に見舞われております。日本においても、戦後最大の経済危機にあつて、大変、困難な時代を迎えています。輸出を中心とした産業界はこの経済不況に喘いでおります。また、現在の日本における失業率は 4% を超え、多くの方々が苦しんでおります。

これから社会に船出しようとするあなた方は、いきなり、経済不況と云う嵐に遭遇する事になります。この状況に多くの皆さんが大変不安を感じている事と思います。とくに派遣業界に進む方や非正規社員に該当する方々の困惑は如何ばかりかと思ひます。皆さんが就職した後、不当な解雇等の不利益を蒙った場合、是非、大学に相談して下さい。私達茨城大学は、あなた方の味方であり、あなた方を出来るだけ支援したいと思います。

さて、私は本学を卒業する皆さんに 1 つの願いをしたいと思ひます。皆さんは 21 世紀を生きてゆく事になりますが、地球をこれ以上、苛めないでほしいのです。

人類の文明は、およそ 1 万年前に農耕活動と共に始まりました。この 1 万年の間、人間の農耕と牧畜活動により、砂漠化が広がるなどの影響がありましたが、地球はそれほどの大きなダメージを受けた訳ではありませんでした。しかしながら、250 年前に産業革命が興り、大量生産の時代になると、地球は深刻な影響を受け始めました。地球の一番傷つき易いところは、地球大気です。地球の大気は、厚さが 100km 以下で、地球表面にへばり付いた大変薄い大気層です。自動車で走れば 1 時間位で、大気層を突っ切ってしまう。したがって、人類の産業活動では、真先に大気が傷つきます。1980 年から 2000 年にかけて、フロンガスによる大気中のオゾン層の破壊が進行し、南極で

のオゾンホールとして良く知られていました。フロンガスは冷媒や洗浄液や整髪料などに使用されていましたが、幸いにも世界的に使用が1990年頃より制限され、大事には至っておりません。大気中のオゾン層は、太陽光のうちの有害な紫外線を取り除いてくれます。もし、そのまま、オゾンホールが拡大し、オゾン層が破壊されれば、皮膚ガンや目の失明等が激増し、大変な事態になっていたでしょう。ただし、現在のオゾンホールは引き続き存在しており、消滅までには数十年もの年月がかかるでしょう。一旦、傷ついた地球は、すぐには戻らないのです。



現在、問題になっているのは、大気中の炭酸ガス濃度です。産業革命以降、大気中の炭酸ガス濃度は着実に増加しています。産業革命の開始時は280ppmでしたが、現在では390ppmになろうとしています。すでに1.4倍になっています。元禄時代の忠臣蔵では雪の場面が多くありますが、現在の東京ではほとんど雪が降りません。このまま炭酸ガスが増加すると地球はさらに温暖化が進みます。温暖化が進めば日本の冬も暖かくなり、結構なことだとも思えますが、それほど簡単ではありません。温暖化が進むと、世界の穀倉地帯では水分が速く蒸発して十分な穀物を収穫出来なくなるため、世界は食糧難になります。現在の日本の食糧自給率は約40%程ですが、食糧の輸入が出来なくなると大変です。さらに世界中で水をめぐる紛争が頻発するでしょう。事が大事に至る前に、問題を解決する必要があります。この問題は炭酸ガスの問題であると同時に、エネルギーや食糧の世界的課題に直結しています。今、我々が行動を起こさなければ手遅れになります。21世紀を担うあなた方には、余分な炭酸ガスを排出しない「低炭素社会」の実現に真剣に取り組んで頂きたいと思います。

地球大気の次に問題なのは、地球の地殻に濃集している金属資源です。20世紀までに枯渇した金属は1つもありませんが、21世紀中に重要な金属資源が枯渇する可能性が高いと考えられています。金、銀、銅、亜鉛、鉛、錫、ニッケル、水銀などが2050年までに枯渇する可能性があると言われています。石油も21世紀中に枯渇するかも知れません。このうち、水銀の枯渇は印象的です。私の子供の頃には、温度計や体温計は水銀が使われており、銀色をしていました。今では、赤インク入りの有機溶媒が使われており、赤い色をしています。水銀が枯渇し始めたので、水銀は有害であるとの認識も相まって、水銀は温度計に使用されなくなりました。金属が地球から無くなれば、他の惑星から供給すれば良いのではないかと云う意見もありますが、残念ながら、月や火星には、ほとんど金属鉱床がありません。金星には存在する可能性が若干ありますが、金

星の地表面の温度と大気圧は、500℃で 90 気圧もあります。さらに濃硫酸の蒸気が立ち込めており、とても人間が近づけられるものではありません。有用金属は、地球でしか産出できません。したがって、これらの枯渇金属は、リサイクルにより、21 世紀では循環的・永続的に使用しなければならないのです。



結論的に云えば、21 世紀は「循環型の持続可能な低炭素社会」にならざるを得ません。この持続可能な社会を皆さんが作り上げて行く事になります。この持続可能な低炭素社会は、20 世紀の社会とは全く違った世界になるでしょう。20 世紀では、世界大戦を始めとする戦争の時代であり、世界的に激動の世紀でした。エネルギーは使いたい放題であり、世界経済も目まぐるしく変化しました。最近の 50 年間を見ましても、日本の経済は激しく変動しました。1960 年代後半の「いざなぎ景気」、1980 年代後半の「バブル景気」、そして、2000 年代初頭の「所謂いざなみ景気」があり、15 年から 20 年の周期で変化しています。その景気の間には経済の停滞期があつて、その度に我々は翻弄されて参りました。21 世紀では、20 世紀とは全く異なった「安定した循環型の持続可能な社会」を目指して、人々が安心して暮らせる社会をあなた方に実現して貰いたいと思います。これが私からのお願いで御座います。

21 世紀は、「知識基盤社会」とであると云われております。あなた方がこの「知識基盤社会」を担う役割を負う事になります。21 世紀においては、科学的知識と技術革新は驚く程の早さで進むでしょう。この急速な変化に適格に対処するためには、大学で学んだ知識だけでは、時代遅れになると思われます。あなた方の「知識基盤社会」では、

常に勉学し続ける事が必要です。21世紀は「本格的な生涯学習社会」でもあります。あなた方は、この「本格的な生涯学習社会」に充分対応できる能力を、茨城大学で身につけたと信じております。是非、頑張って新しい21世紀を切り開いて頂きたいと思えます。

今、皆さんは本学を卒業し、或る人は社会に旅立ち、また或る人は進学致します。これから向かう其々の進路で、思う存分、頑張ってください。これからのあなた方の人生には、辛い事もあるでしょうし、楽しい事もあるでしょう。「人生は七転び八起きだ」と云われています。楽しい時は、人と一緒に喜び合うのが良いでしょう。辛い時は、いたずらに悲観せず、将来を見据えて困難を打開して下さい。幾多の喜びや悲しみを乗り越える事ができれば、あなた方は、社会や職場で信頼され、頼りにされる存在になるでしょう。あなた方が早くそう成って呉れる事を期待しております。茨城大学の教職員は、皆さんが其々の進路で、元気で活躍して呉れる事をいつも願っています。さらに皆さんの先輩や後輩もあなた方の活躍に声援を送っています。卒業される皆さんには、茨城大学の関係者があなた方を常に見守り期待している事を忘れないで頂きたいと思えます。

最後に改めて皆さんの卒業を祝い、これからの皆さんのご活躍とご健康を心から祈って、饞（はなむけ）の言葉と致します。本日はご卒業本当におめでとう御座いました。



## ◆ 永年勤続者表彰

平成21年3月31日をもって定年により、退職される方々の永年勤続表彰式が、3月30日（月）事務局第三会議室において、池田学長、白石副学長（教育担当）、長谷川事務局長 ご列席のもとに執り行われました。

なお、被表彰者は次の方々です。

### 学長表彰

総務部	総務課長	小澤 清志
総務部	専門職員	海老根 保
学務部	入学課長	仁平 諭
学務部	課長補佐	本田 茂男
学務部	課長補佐	吉成 榮一
学務部	専門員	宇佐美俊一
学術企画部	課長補佐	皆川 久夫
学術企画部	図書館企画係長	根本 茂
学術企画部	専門職員	久信田幸道
人文学部	事務長	杉田 政和
教育学部	技能職員	原 輝雄
教育学部	教育職員	鈴木 香代
理学部	総務係長	横山 茂
工学部	技術専門員	谷川 邦夫
工学部	技術専門職員	田名部菊次郎
農学部	技能職員	日下部住子

